

読書感想文入賞作品

『海と毒薬』 遠藤 周作 著

良心の形成

—「海と毒薬」を読んで—

情報工学科1年 杉谷 唯子

私が遠藤周作「海と毒薬」を読んだのは、この作品が太平洋戦争中に起こったことを題材にしていたからだ。集団的自衛権の賛否など、さまざまな問題が議論される中、戦争について取り扱った作品を読みことで、自分の考えを持つことができると思った。

話しの本筋は、勝呂という医者が大学病院で見習いをしていたところから始まる。「戦争で死なん奴は、毎晩、空襲で死ぬ」といい、暗い雰囲気の中、医学部長の座をめぐる軍と結託した「おやじ」こと橋本教授の一派は米軍捕虜を使った人体実験を実行し、勝呂もその手伝いをするようになる。実験が終わった後、勝呂が空を眺めながら、立原道造の「雲の祭日」を眩こうとするシーンで物語はよられる。

詩を目でなぞり、本を閉じた後、私はじわじわと不快感が襲ってくるのを感じた。そのくらい救いようのない話だった。人体実験以外にも多くのエピソードがあり、その度に本を置いて、別の本を読むことにしようか迷った。勝呂が受け持っている患者に「先生、手術ばすましゃあ、私は治りますじゃるか」と聞かれる場面では、本当に自分がすがられていると思うくらい胸が苦しくなった。勝呂もとい読み手の私は、その手術が実験的なものであり、成功率はほぼゼロに等しいことを知っているからだ。その手術を、勝呂の親友である戸田を筆頭に、周りの人がみな「空襲で死ぬより、よほど後世に役に立つことだからしょうがない」と言っているのも恐ろしかった。

その患者の死後、捕虜に対する人体実験が行われることになった。

診察だと説明された彼らは「やわらかな碧い眼や時々浮かべる人懐っこい微笑」から、毛程も医者

疑っていないことが分かる。なしくずしに参加した勝呂は、彼らに麻酔を打つことができなかった。代わりに戸田が麻酔を打ち、捕虜は、人間はどれだけ肺を切り取ると死ぬのか、という実験を受けて死んだ。その様子が目に浮かぶようで、読んでいてやりきれない気持ちがあふれた。

私はこの本が決して「戦争の悲惨さを伝えたい」がために書かれたものではないと気づいた。戦争云々よりもその前提にある「人間の良心」について読み手に疑問を投げかけているのだ。人体実験はきわめて非人道的なことで、絶対に許されてはならない恐ろしいことだ。しかし私たちはなぜそれを恐ろしいと思うのか、「他人の眼や社会の罰だけ」を恐れているのか、もしそれが除かれれば、私たちは他人の死や痛みにも何とも感じないのか。私は「いいえ」と答えたい。本を読み、紙上の出来事に心を痛めるのと同じように、いやそれ以上に、日とは日常の出来事から刺激を受けて生活し、そこから「道徳」の観念を得ている。「他人の眼や社会の罰だけ」を恐れるのは、戦争が価値観を歪めてしまったからだ。人との触れ合い、人から慈しまれ、さまざまな体験に参加することでできた価値観は、もうと深層から善悪の判断をつける。今回の読書のように、思慮を深められる経験を多くして、私自身の考え方を育んでいきたいと強く思った。

『柳田國男の教育構想

国語教育・社会科教育への情熱』 関口 敏美 著

日本の昔の教育から見えるもの

—「柳田國男の教育思想」より—

機械工学科2年 山田 清香

柳田國男といえば、「遠野物語」など民間伝承や妖怪伝説の研究を思い浮かぶが、彼はそれ以外にも子

供の教育、特に以前の農村で行われていた「前代教育」に強い関心を持っていた。大学では「三倉」という飢饉時の救済について研究し、その後、農政官僚となった人物で、国民総体の幸福のため「何故に農民は貧なりや」の問題の解決にまい進した。当時の日本の学問が西欧の受け売りであることを批判的に捉え、日本の農政の出発点として、農民の本然を郷土研究に求めたところに学問の方向展開があったようだ。

長期にわたる視察や講演で各地を巡るうち、無視できない文化の地域差を目の当たりにした。山を一つ隔てただけで言葉も違えば価値観も違う。その地域差は各地の歴史の中にあるとの視点により、各地域の経済的条件を歴史的に研究した。興味深いのは、学問に一切の柵を立てずに自由に思考した点だ。例えば、所有者のいない「無主」の土地を共有するという点に産業組合の理念を見たり、獲物の分配の際に、まず神に供えるという山の神信仰などから、信仰生活が民衆の心理にどう働くか、つまり経済と信仰を軸とした農民の本然を探求したりしたことだ。

その後、彼は国際連盟の仕事に携わっていたが、関東大震災を機に帰国。民俗学の形成の為、全国の青年教師に呼びかけを行う。当時、教育は全国一律の近代教育が始まったところだが、彼はその改革にも深く関与していく。

学校のない時代、日本人は無知で野蛮だったかといえば、そうではない。各地域で、「一人前」の人間を形成するため、様々な取り組みが行われていた。「一人前」とは「一定の社会道徳や行動様式を身につけた人間、共同生活の必要から生まれた美徳長所を備えた人間のこと」とある。取り組みのひとつにお宮参りや七五三といった通過儀礼がある。通過儀礼の役割には、子供の社会的生存権を認める役割と、発達の節目での関門としての役割がある。生まれた子供を仲間の一員と認め、その発達を認識し、確認し合い、成長を地域で見守っていた。この関門として

の役割を柳田國男は「何れも人間の今の力に相応した誠にやさしい又親切な試験」と表現している。省略することのできない関門を通過することで、誰もが落ちこぼされず、次の段階へ進んでいく。どの子供も一人前にしたいという、昔の大人の知恵やまなざしが感じられる。

近代教育が読み書きから始まるのに対し、以前の世の農村の教育法「前代教育」では、聞く・話すことから始まる。地方の生活後である方言、口語も重視し、それらの能力が十分に育った上で、次の段階として読み書きの能力を育てた。遊ばせ唄、昔話、ことわざなどの口承文芸も子供の聞く・話す能力を伸ばす手段として使われていた。こくご教育の役割は「考える言葉」の育成である。様々なことを広く深く考えるためには、広く深く考えるためだけの言葉の量が必要だ。又、その土地独自の方言や、言い回しの中にある微妙な雰囲気のようなものが、感性を育て、人と人との交流を深く温かにする。

表現する能力を重視する「こくご」において、文学や芸術を解決する手段である本を用いて、つまり読書により言葉を学ぶことは、無理な手法であり、不完全な「片言」を生じさせる、と筆者は言う。

戦後、高度経済成長とともに都市勤労者が増え、核家族化が進んだ。それまでの「親はなくとも子は育つ」という教育体制は崩れ、家族が一身に子供の教育を担うことになった。学歴社会といわれる現代、親の格差は子供の格差につながり、家族単位の子育てには限界が生じている。社会から取り残されていく子供が増え、悲しい事件が後を絶たない。学校というルールから一度放り出されてしまえば、そこには驚くほど情報がなく、受け皿も少ない。何か特別な才能や状況があれば別だが、学校を出なかったということは、現代の社会では努力だけではなかなか埋まらない大きなハンデになるだろう。身分がなくなると言えばいいか、履歴書には何も書けず、まるで社会から無視されているように感じられる状況もある。

核家族化の進む現代社会で、家庭内だけで子供の問題を解決することには無理がある。親が子育てや家庭で困った時に相談できる環境や、子供のストレスや悩みを聞いてくれる家族以外の存在など、周囲の大人たちも子育てに参加することが大切だ。しかし近所同士がべたべたと付き合うことが良いというわけではない。「あの家で子供が生まれたって。」とか「あそこのおじいさん、死んだんだって」とか、それくらいのささやかな繋がりがあれば良いのではないだろうか。虐待や少年犯罪、いじめなど、周囲の見守りがあれば防げる事がたくさんあるかもしれない。隣に誰が住んでいるのか知らない、近所の子供が一人いなくなっても気付かない、そのような状況が現代の社会には存在している。どんな個性を抱える子供も周囲から見捨てられず、落ちこぼされていくことがないような、セーフティーネットが何重にも張られた見守る社会が本当は理想だ。近代教育が悪で前代教育が良いということではない。時代も違えば、世の中の価値観も過去とは変わっている。ただ、格差の広がる冷たい現代の社会に血を通わすような、そんなヒントや知恵が前代教育の中にあるのではないだろうか、とこの本を読んで感じた。

『天空の蜂』 東野 圭吾 著

現代の原発問題に対する意識

機械工学科1年 末永 共助

現代において、「原発」というものに対する国民一人一人の意識は、どのようなものだろうか。少し前には東日本大震災が起こり、その影響で福島第一原発に大損害が発生した。さらに、その被害による放射能の影響が大きな問題となって取り上げられた。その時、人々はどのように反応しただろうか。福島県に近い所に住んでいる人たちは特に、原発に対して大きな不安、不信感が生まれたと思う。その結果、

原発の撤去を求めた人々もいたことだろう。それと比較して、原発があまり身近に無く、原発についてよく知らない人の中には、原発に対しての恐れは抱いても、「自分とは直接関係ないからいいや」といった考えを持った人が大勢いたと思う。

僕は、この読書感想文を書くにあたり、「天空の蜂」という本を読んだ。この本では、テロリストが原発「新陽」の原子炉上空にヘリコプターをホバリングさせ、全国の原発を使用不能にしないとヘリコプターを墜落させると発表する。そのときの国民の反応や思いが深く表されている。

例えば登場人物の一人は、「原発が事故を起こすのは困るが、原発が無くなるというのも困る」というような、どっちつかずの意見を述べている。他の一人は「原発は無くすべきだ」と徹底して意見する。現代には前者のような人物が多いのではないだろうか。

僕も福島第一原発が事故を起こした当時は「自分とは関係ない」と考えていた。しかし、成長するにつれ、自分の考えを持つことの重要性を理解した。多くの人は何か事故が起きると、それに関係した人に対して責任を追及するが、自分自身は責任から逃れようとする。その姿が嫌だったからなのかもしれない。

人はそれぞれ考え方、思い、意見が異なる。まさに十人十色だ。しかし、だからこそ責任から逃れずに、自らの意見を持つ必要があると、この本を読んで改めて感じた。

結局、この本では犯人が捕まり、犯人は原発の関係者だったことが明らかになるのだが、「天空の蜂」と名乗ったその犯人たちは、物語の登場人物だけでなく、現代の読者にも大きな衝撃を与えたに違いない。原発廃止か、はたまた存続か。自分の意思をしっかりと持っていなかった人にとっては、このような質問はある意味フェルマーの最終定理レベルの難問になると思う。最近では東日本大震災によって、少しは原発に対する意識が高まったかもしれないが、国民が自分の責任から逃れ、他の人に責任をなすり付ける

ことで原発に対する意識がまたも低下したとき、そんなときにはまたも事故が起こるかもしれないと考えた。一人一人がきちんと意思を持ち、「蜂」に刺されないようにしながら、より良い未来を築いていく必要があるのではないだろうか。

『ゴールデンボーイ 恐怖の四季 春夏編』
スティーブン・キング 著

希 望

電子制御工学科1年 西尾 颯真

私がこの本を読んでもみようと思ったきっかけは、両親に「好きな映画は？」と尋ねたところ、父母共にあげた作品の中に「ショーシャンクの空に」というのがあって、ラストシーンがとても印象に残っているということでした。母が原作本を持っているというのでそれを借りて読んでみることにしたのです。

この本の作者は「スティーブン・キング」という人でとても有名ですが、他の作品はホラーやサスペンスなどけっこう怖い感じの長編小説が多いです。ですがこの作品は、春夏秋冬を背景とする四つの中編小説の中の一つで、その中の一つにはあの有名な「スタンド・バイ・ミー」もあって「スティーブン・キング」の他の作品とは少し感じが違っていてホラーではないのです。

原作「刑務所のリタ・ヘイワース」は簡単に言うと無実の罪で囚われた人の脱獄物語です。真面目で有能な銀行員だったアンディは、妻とその愛人を殺したという罪で、ショーシャンク刑務所に服役します。外の世界から切り離されたその世界では、囚人同士の暴行、看守たちの横暴、所長の横領といったありとあらゆる犯罪が黙認されています。社会が公に認めた場所でまかり通る犯罪。本当の罪とは何なのかを考えさせられます。そんな中でアンディはなぜかいつも静かな空気を身にまとっていて、十代の頃に

殺人罪で投獄され、既に何十年も服役している調達屋のレッドはそんなアンディに興味を覚えて関わっていきます。物語はこのレッドの目線で語られています。狭い世界で権力をふるう人間の闇に触れながらもアンディは知識や知恵で限られた小さな世界でのささやかな自由の範囲を広げていきます。銀行員だった経験から所長の賄賂や裏金といった表に出ない金の管理を任せられます。物語途中でアンディの罪は冤罪だとわかるのですが、所長は深く知りすぎたアンディを手放さないようにする為にそのことの証拠となる囚人を射殺するのです。アンディにはもう二度と外の世界に出る機会を訪れないのです。

物語の百三十ページ、いきなり「一九七五年に、アンディ・デューフレーンはショーシャンクから脱獄した。」という一文が目にとびこんできます。もうその後はぐいぐい引き込まれて最後まで一気に読んでしまいます。実に投獄されてから二十七年後のことです。その間、アンディはこつこつと小さなロックハンマーで壁に穴を掘り続け、その穴を「リタ・ヘイワース」をはじめとしたさまざまな女優のポスターで隠し続け、見つかる恐怖と戦い抜いたのです。

この物語のテーマは、題名の下に一春は希望の泉とあるように希望を持ち続けるということなのだと思います。

アンディの無実の罪で奪われた時間は、もう決してとり戻せない。けれど生きていく為にはそれも又、現実として受け止めるしかない。そして、そこから見出せる希望を抱いていくのだ。何かと闘っていると思う時、それはたいてい自分の弱さだと感じる。敵は他人ではなく自分自身の未熟さだと思う。他人を変えるなんてことは難しいが自分ならいくらでも変わるはずだと思う。

原作には、両親が感動したというラストシーンは直接的には出てきません。でも、私の目の前にはどこまでも続く海と青い空が見えた気がしました。

『バケモノの子』 細田 守 著

人との繋がりとは

—「バケモノの子」を読んで—

物質化学工学科1年 今村 尚真

「九太！」いきなり聞き覚えのあるしゃがれ声があった。「何泣いてんだバカヤロウ！メソメソしてる奴はキライなんだよ！」胸の中からその声は響いてきた。熊徹一。その瞬間、僕は今自分が主人公であるかのような気分になった。ずっと孤独だった主人公が、もう一人じゃない。そう思うと、胸に温かいものがこみ上げるのを感じた。

読書感想文の題材として「バケモノの子」を選んだのは、昨年この作品の前作である「おおかみこどもの雨と雪」を読んで、細田守監督の原作小説が好きになったからというのと、題名や表紙に描かれているバケモノと少年がどんなやり取りをするのか読んでみたいと思ったからである。

「バケモノの子」は、内向的な少年がある日ふとしたきっかけでバケモノと出会い、そのバケモノに弟子入りする物語だ。

もしこの本のテーマがあるとなれば「家族や友人の大切さ」だろう。きみょうな師弟関係の二人はことあるごとにぶつかり合う。だが、修行と冒険の日々を重ねるうち、次第に絆が芽生え、ともに成長する。細田守監督は今回の「バケモノの子」で、血縁ではなく、心・技・体を受け継ぐ「精神的親子」を描こうとしたのだと考えられる。家族がいなくなることを考えたとき、とても悲しく、寂しいと僕の中で感じた。ふと振り返ってみると家族がいるのは当たり前。うっとおしいとさえ思っていたように思われる。喧嘩できる家族がいるのは幸せなことを再確認した。

物語の終盤、バケモノはバケモノたちの頂点を決める戦いに参加し、見事勝利する。しかし、決勝で負かしたライバルの弟子が逆上し、バケモノを殺そうとする。実はそのライバルの弟子も主人公と同じ

人間であり、人間の心だけに存在する「闇」が暴走したのだと、作中では語られている。これは、人間は誰しも心に闇を持つということだと考えられる。例えば、大切な人を傷つけられたら、ただ悲しいだけでなく、怒りが湧くのは当然である。その怒りが抑えきれなくなったとき、行動に現れてしまうのも、当然ではないだろうか。

バケモノたちは人間のような「心の闇」がない。僕は人間なので、心に闇があるという感覚についてはわかる。だから、バケモノたちの感覚は新鮮で、悔しい・悲しい・腹が立つ・がっかりする・、でもそれだけであり、あとあと恨んだりはしない。あくまでも自分の感情に素直なだけである。一方、人間はそこから妄想を生み出す。しかしそれは相手に確認したわけではない一人芝居で、相手は相手に別の妄想をしてたりする。そういった妄想がお互い溜まって、最初は些細な行き違いだったのが、複雑な恨み・憎しみに発展してしまったりする。すなわち「心の闇」というのは、「誤解の束」ではないかと考えられる。そして、素直な感情と妄想の違いは、自分目線かどうかである。僕は少なくとも、「今勝手に妄想してるな」と気付けるよう心掛けたい。

『ビブリア古書堂の事件手帖』 三上 延 著

続きがとても気になる推理

物質化学工学科1年 橘 優太

まず、この本と出会ったきっかけは書店で見かけて興味をもったことでした。正直、自分でも興味本位で買ったのにここまで続きが気になる小説に出会ったのは初めてでした。

物語の舞台は鎌倉の片隅でひっそりと営業をしている古本屋「ビブリア古書堂」。その店主は古本屋のイメージに合わない綺麗な女性。人見知り接客をする者として心配になる女性。だが、古書の知識

は飛び抜けている。本には人一倍の情熱を燃やす彼女のもとには、いわくつきの古書が持ち込まれることもあった。彼女は古書にまつわる謎と秘密を、まるで見てきたかのように解き明かしていく。これは彼女（篠川葉子）と客人が織りなす、「古全てのしていた会社が倒産し、大学卒業後無職の状態が続いていました。祖母の遺した「漱石全集」を査定してもらうために「ビブリア古書堂」を訪れ、そこで葉子に祖母の秘密を解いてもらった縁でアルバイトとして就職しました。のちに二人で古書にまつわる謎と秘密を解き明かしていきます。

この物語を読んで感じたことは、物語の人間関係については話がどれも凝っていて、古書は綿密に調べられていて圧巻でした。話を読むにつれて登場人物が沢山でてきて、全く関係がないと思っていた人物同士が実は関係があったりして、そういうところが見所です。登場人物が皆、個性的なところが魅力的だと思います。特に、葉子の古書の話になった時の対応の変わり方は際立っていると思います。でも、そのギャップがいかに古書が好きかということが伝わってきて良いです。

僕は物語を読んでとても心に残る言葉と出会いました。それは葉子の言葉で「わたし、古書が大好きなんです・・・人の手から手へ渡った本そのものに、物語があると思うんです・・・中に書かれている物語だけではなくて」という言葉です。読んだ時深い言葉だなと感じました。図書館で借りた本がこの言葉で貴重な本を借りていると思いました。一冊、一冊の本に物語（歴史）があってそれがいろんな人を通じて現代まで残っていると考えると素敵でなによりすごいことだと思います。これは本に限らず身の回りにある全ての物に共通するのではないのでしょうか。そう考えると物に対して今まで以上に愛着がわくと思います。

物語を読み終わって僕の推理小説に対するイメージは大きく変化しました。もっと堅苦しい物かと

思っていたのですが、むしろ早く次の巻を読みたいと思うようになりました。

物語を読み終えて僕が得たものは物に対する価値観の大切さです。こうした良い価値観が世界中に広がれば世界はもっと綺麗になると思います。

今後の読書はこの物語のような自分に大切なことを教えてくれるような物語を読もうと思います。

最後に、あなたはこの物語を読みたいと思いませんか。きっとこの物語はあなたの心に何かを与えてくれるでしょう。ぜひ読んでみてください。

『わたしはマララ ～教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女～』
マララ・ユスフザイ 著

世界平和の為に

—「わたしはマララ」を読んで—

電気工学科2年 秋山 莉香

私が彼女の存在を初めて知ったのは、イスラム過激派による襲撃で重傷を負った少女がいたというニュースをテレビで見た時でした。その時は、彼女は不運でテロに巻き込まれてしまったのだと思っていました。ところが、実際は偶然ではなく、むしろ、彼女を標的として行われたものだったのです。

なぜ、彼女は標的にされてしまったのか、それは、彼女が、女性が教育を受けることを主張していたから、というあまりにも理不尽な理由でした。TTPは女性から教育を受ける権利を奪い、教育を受けようとしたら、推進しようとする方の命を優先的に狙うという卑劣な集団です。マララさんは、襲撃により頭部と首に銃弾を受け、意識不明の重体に陥ったにも関わらず、奇跡的に回復されました。このような恐ろしい体験を私と一つしか変わらない、わずか十五歳の時にしているのです。もし、私が、マララさんと同じ体験を、今していたら、私なら会う人みんな

が怖く感じ、外出すらできなくなると思います。

ところが、彼女は違いました。彼女は、彼らに全く屈せず、彼らに尚も女性の権利について主張し続けたのです。また、恐れるどころか、タリバンのテロリストが「どの子がマララだ。」と聞いた時に、テロリストに「教育は受けるべきだ。」という機会が無かったことを後悔していると言います。答える機会があれば、少女が学校に行くことを認めさせられたかもしれない、と言うのです。私は、彼女の強さに驚きを隠せませんでした。私にはとてもそんなことはできません。なぜなら、そのようなことを言うと、さらに標的にされ、いつ殺されるか分からないからです。同時に、こんなにも非道なことをさせるように人を変えてしまう宗教はとても恐ろしいと感じました。はじめから恐ろしいことばかりする宗教は存在しないと思います。ところが、宗教の指導者の考えで、信仰する人々がその考えを浸透させる為に、話し合うなどということせず、武力で制圧という行動に身を投じてしまうのです。これには、教育を受けていないから、という理由もあると思います。もし、教育を受けていたとしたら、自分の考えを相手に分かってもらえるように、まず、伝えようと努力し、なかなか伝わらないとしても、人を傷つけることは決してせず、もう一度自分の考えを見直すと思います。なぜなら、学校では、人を傷つけることはどんな理由があろうとも、間違いであると教わるからです。

私は、日本で戦争の無い時代に生まれ、教育を受ける権利を持っていて、更には中学校までは教育を男女とも受けることが義務付けられています。衣食住にも不自由していません。戦争に対して、肯定的な考えを持っている人もほとんどいません。今まで当たり前だと思っていたことも本当に幸せなことであり、感謝すべきだとこの本を読んで、強く思いました。

そんな環境に恵まれている人こそが、マララさんのように強い信念を持って、マララさん一人に戦わ

せるのではなく、テロリストたちに立ち向かっていくべきだと思います。それは、もちろん人を傷つける武器ではなく、彼女が言っていたように、一人の子供、一本のペン、一冊の本により生まれる教育という、最大の武器で。

『カラフル』 森 絵都 著

なりたい色に向かって

—「カラフル」を読んで—

情報工学科2年 高城 頌太

「今日と明日はぜんぜんちがう。明日っていうのは今日の続きじゃないんだ」

私の心に染み込んできた一節だ。この本を読み終えた今、私にはこの言葉の意味がとてもよく理解できる。

今日、にこやかに話しかけてくれた友達が、明日も同じように接してくれるかどうか分からない。私も同じ花をみても、今日の見え方と明日の見え方は違うかもしれない。

優しくなったり、意地悪になったり、様々な側面があるが、そんな多様の面のすべてをひとまとめにして私なのだ。私だけでなく、他の人にも同様に多様性がある。

自分でも自分がどんな人間なのかわからなくなることがある。ましてや他人の多様性を受け止めることなどできるはずがない。そんな物事の一面だけを見て絶望して、主人公の真は、自殺してしまう。真は家族間の不和、いじめ、理想と現実のギャップなど様々な問題を抱えていて、ショックな出来事が立て続けに起こったのだ。悪いことが重なるといふことはよくあることで、そんな時は、物事の暗い面ばかりを見てしまいがちだ。

しかし、真の身体に乗り移って、「ぼく」が真として生活していくうちに、真がおかれている状況を客

観的に見られるようになっていく。自分の気持ちを素直にぶつければ、周りの親、友達、先生などが本当はどう思っていたかということが理解できるようになってくる。自分の殻ばかりに閉じこもっていて誤解しては何の解決にもならない。

そうして「ほく」は、人の美点、欠点について見出ししていく。

母親は何でも飽きっぽい性格だが、それはチャレンジ精神旺盛でもあるということ、兄は普段は意地悪だが、真が病気になった時は病室で付き添ってくれたことなど、人には様々な面があることに気付く。それまでの自分の一方的・表面的な見方しかできなかったことを後悔し、家族の本当の姿を知る。

人間はもっと複雑で、白、黒単純に判断できるものではなく、見る角度によって、また見る人の成長によって、様々な色、つまりカラフルに見えるということに気づいたのだ。

本文でこんな一節がある。

「それは、黒だと思っていたものが白だった、なんて単純なことではなく、たった一色だと思っていたものがよく見るとじつにいろんな色を秘めていた、という感じに近いかもしれない。

黒もあれば白もある。

赤も青も黄色もある。

明るい色も暗い色も。

きれいな色もみにくい色も。

角度次第ではどんな色だって見えてくる。」

変な先入観、偏見を持って人を見てしまうのは、本当に危険なことだと思う。これから私は、様々な角度から人を見ることができそう。そして私自身の色を作っていく。できれば、様々な色が混ざり合って美しい変化をもたらすことができるように。そうすればきっと、他の人の色にも影響を与えることができると思う。

それには多くの人と出会い、たくさんの経験をし、たくさんの勉強をすることが必要だと思う。世界で

一つだけの自分の色を作るために日々を大切に過ごしたいと思う。

『バケモノの子』 細田 守 著

誰もが抱える闇

物質化学工学科2年 多田 佳奈枝

人は誰もが大きさは違っても闇を抱えています。そしてそれらを自分の中では考えては苦しみ、耐えられなくなって逃げだしたりして、解決できないまま自分の中の奥底におしこんでしまいます。そうすることで誰かを信じる力を失い、一人になってしまふ人が、または子供がいるのは事実です。そんな中で、ふと出会った誰かが自分と同じ悩みをもっている、または自分と同じ状況だと知ったとき、不思議なことにその人を信じてみようと思うようになります。

この本の主人公、九太はまさにそのとおりです。両親は離婚し、どこに親がいるのかも教えてもらえず、親戚の勝手な都合で親戚に預けられることになったときに、九太は反抗して逃げ出してしまいます。一人になって迷い込んだのはバケモノばかりの世界で、そこで出会った熊徹の弟子にされ、九太という名前も彼に名づけられますが、やはり九太の心は深く傷ついているため信じることができません。そんな時、熊徹も一人で戦っていることを知り、九太の心は少しずつ変わっていき、喧嘩しながらも最高の師弟関係を築いていきます。そんな中、このバケモノの世界に人間が入ってはいけない理由が人間の抱える闇が大きすぎて誰も止められなくなってしまふことであり、その世界には九太だけではなく、もっと大きな闇を抱えた人間がいることがわかります。九太とは違い、なぜ本当に強くなることができないのかと疑問に思いつけたことから、本人が人間であることに自分自身で気づかされないまま、彼は誰にも止められ

ず、九太一人が立ち向かっていました。何も信じられず生きる希望すらなくなりつつあった九太が、熊徹と過ごす中で心も成長し、最初とは比べ物にはならないほどの強い心をもつようになっていました。やがて熊徹は九太の「心の剣」となって、人間がもつ大きな闇に勝つことができました。それは戦う強さもありますが、本当の心の強さを表しているのだと思います。

人には必ず闇があります。その原因は幼少期に育つ環境、つまり親に責任があると思います。友達がいないだとか一人でいるとき、寄り添ってあげるべきなのは親なのです。この時代、共働きで忙しくて相手をしてあげられる時間がなく、子供を一人にしてしまうことが少なくないはずです。そんな時にだんだんと心の闇が大きくなっていきます。そのときくらいは、子供だけを見つめて、寄り添って安心させてあげてほしいと思います。便利な時代になったからこそ、知らない間に携帯電話のコミュニケーションツールなどで傷ついたりするので、よく見守ってほしいと、子供の立場から思います。だからといって、親任せにするのは良くありません。九太のように心の中に剣を持って、戦う強い心と、人を思いやる優しい心をもってほしいと思います。傷つくことは数え切れないほどあり、避けることはできません。しかし、自分が最大に弱った時、食いしばってどんなことにも絶対に負けないでほしいです。必ず笑顔になるときがきます。私も人を信じられなくなった時がありました。泣いて、泣いて、それでも食いしばって頑張ったからこそ、いま何に対しても頑張ることができています。そして毎日笑って過ごしています。九太と同じく、私はもう絶対に負けません。

『億男』 川村 元気 著

「欲」と「お金」の真意

—「億男」を読んで—

情報工学科3年 林 大泰

もし思いがけない形で自分のもとに大金が転がり込んできたらどうなるだろうか。誰もが一度は考えたことがあるかもしれない。

本書は、棚からぼた餅的な展開で3億円を手にした主人公の一男が、そんな不安を抱く場面から始まる。

彼はその大金の使い方をかつての親友で今や大富豪となっている、九十九に会って相談するが、なんと九十九は一男の3億円を持って失踪してしまう。一男は彼を探すため、彼の元同僚で億万長者でもある3人の人物に会って話を聞きながら、この作品のテーマでもある「お金と幸せの答え」について考えていく。

「お金と幸せの答え」とは何だろうか。作中でそれをバツサリ断言している箇所はないが、最後の場面では、一男がその答えを家族、もしくは愛する人の幸せなのだ気づいた、というような解釈ができる。一男のように家庭を持つ社会人としては確かにそんな答えもあるだろう。だが、人生を共にする伴侶がいるわけでもなく、かと言って特別愛していると言える人もいない、悲しい事だが例えれば私のような人間にとっては少し答えが違ってくるのではないだろうか。

両親や兄弟の幸せも大事だがこれとは少しニュアンスが異なる気がする。では他にどんな答えが挙がるだろう。一つ、私は「欲を満たすこと」だと考える。

人間には様々な「欲」があるが、それらを満たすためには幾らかお金が必要になるケースが多い。そうした「欲」を満たさずにいると、ストレスを感じ、幸せでないと思ってしまうことが多々あるだろう。

単刀直入に言うと、「欲」を満たすためにお金を使い、幸せだと思えることが答えの一つだということだ。

さらには、その「欲」が本当に欲しいものなのかどうか見極めることが大切だと私は思う。がむしゃらに欲しいものの為にお金を使っているのでは、正しいお金の使い方とは思えない。お金が有限であることを考慮して、本当に欲しいものを探し、それを手に入れる。このことが一つの「お金と幸せの答え」である。

実は作中でも「欲」をテーマとした場面がいくつかある。例えば、一男の妻が登場する場面なのだが、その妻と一男の会話の中でこんな言葉がある。『確かに欲は人間を狂わせる。でもそれと同時に私たちが生かしている』、もう一つ、『なぜなら人は、明日を生きるために“何かを欲する”生き物だから。一』

これらは先程の私の考えと似通っている。生きていくためには何かを欲する必要があるのだ。たとえ億万長者になったとしても、欲しいものがなければそのお金に意味はない。お金は何かを得るために使われるものなのだから。確かに「欲」は人を狂わせる

こともある。ギャンブルなどはその尤もらしい例だ。しかし、「欲」は明日への活力ともなる。これらをまとめるとすれば、飲まれてもダメで、なくしてもダメ、「欲」とはそういうものなのだろうと私は考える。

ここからは余談になるが、私はこの本を読んで色々なことを考えさせられた。お金のこと、人を信じること、大金がもたらすこと云々。

さらに最近、お金に対する姿勢、考え方が曖昧になっていたことも重なり、強く自分の考えが変わるわけではなかったが、それらを改めて見直すきっかけになった本だった。私自身、18という年齢になり、なにかとお金に接する機会も多くなった。

お金を手にした時、どういった使い方ができるのか、どのように使っていくのが正しいのか、ちゃんと向き合いながら考え、これからの生活を送っていくべきなのかもしれない。

図書館の利用にあたっての注意

図書館の本は大事に扱きましょう

時々、付箋が付いたままだったり、中に書き込みがしてあったりする専門書が返却されます。誰か他の人が貸してくれた本に、付箋を付けたまま返しますか？中に書き込みをしますか？図書館の本は、あくまで借り物です。皆の本です。そのことを分かったうえで利用してください。

図書館では静かにしましょう

小声で勉強を教え合うのは構いませんが、時々大きな私語や笑い声が聞こえます。しばらく続くようであれば、注意しに行きます。息抜きでちょっとお喋りしたい気持ちは分かります。でも、静かな館内に、貴方たちだけの声が響き渡っていませんか？貴方が一人で勉強している時、うるさくしている人たちに苛々したことはありませんか？一人一人が気を付けましょう。

返却期限を守ってください

期限内に読み切れなかった本（雑誌）は、他の人に予約されていないければ返却期限を延長することができます。手続きをせず、そのままズルズルと借り続けることはやめましょう。図書の延滞があると、新たな貸し出しはできません。